



代表世話人 池田 学  
副代表世話人 岩坪 威  
名誉代表世話人 小阪憲司

世話人

合馬慎二	朝田 隆	天野直二	新井平伊	井関栄三
鶴飼克行	内門大丈	内海久美子	小田原俊成	小野賢二郎
織茂智之	笠貫浩史	川口 哲	木之下 徹	小林良太
篠遠 仁	東海林幹夫	城間清剛	田北昌史	坪井義夫
都甲 崇	中野正剛	長濱康弘	布村明彦	羽生春夫
福井俊哉	眞鍋雄太	水上勝義	水谷智彦	三村 将
森 悦朗	山田正仁	横田 修	吉岩あおい	吉田光宏
		梁 正淵		

監事

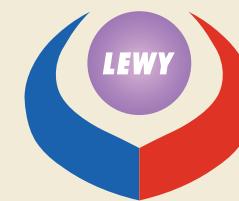
勝瀬大海 藤城弘樹

第17回レビー小体型認知症研究会実行委員会メンバー

池田 学	大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 教授 / レビー小体型認知症研究会代表世話人
岩坪 威	東京大学大学院医学系研究科 神経病理学分野 教授 / レビー小体型認知症研究会副代表世話人
小田原俊成	横浜市立大学保健管理センター センター長・教授 / レビー小体型認知症研究会世話人
内門大丈	レビー小体型認知症研究会事務局長 / レビー小体型認知症研究会世話人
竹中一真	レビー小体型認知症研究会事務局員
中村昌英	レビー小体型認知症研究会事務局員
小阪彰伯	レビー小体型認知症研究会事務局員



2023年11月1日発行  
レビー小体型認知症研究会  
〒220-8143 神奈川県横浜市西区みなとみらい2丁目2番1号横浜ランドマークタワー43階(LM総合法律事務所内)  
TEL: 045-872-4300 FAX: 045-872-4301 MAIL: office223@dlbrg.org http://www.d-lewy.com



Dementia with  
LEWY BODIES  
(DLB)

第17回レビー小体型認知症研究会

2023年  
11月4日(土曜日)

ハイブリッド開催

会場: TKPガーデンシティPREMIUM横浜西口ホール4C

小阪憲司先生  
追悼記念学術講演会  
～ DLBの発見、現在、過去、未来～



MEMORIES OF  
KENJI KOSAKA

<http://www.d-lewy.com>



Dementia with  
**LEWY BODIES**  
(DLB)

## 第17回レビー小体型認知症 研究会開催にあたって

レビー小体型認知症研究会は、今年で17回目を迎えることができました。コロナ禍の影響により、過去数年間はリモート開催を続けていましたが、今回は4年ぶりに対面での開催となります。また、初の試みとしまして、リモート開催の経験を活かし、インターネットライブ配信も行うことといたしました。

この厳しい状況の中で、レビー小体型認知症研究会が継続的に開催できているのは、ひとえに一般会員と賛助会員の皆様のご支援のおかげです。この場を借りて、心から御礼申し上げます。

コロナ禍を乗り越えてきたレビー小体型認知症研究会ですが、今回は新たな試練に立ち向かわなければなりません。本年3月16日、レビー小体型認知症の発見者であり名誉代表世話人である小阪憲司先生が逝去されました。

当会は2007年11月、小阪先生を初代代表世話人として、レビー小体型認知症に対する知見を深め、当事者や家族の皆様へ最新の研究成果を還元することを目標に創設されました。以来、年1回の全国大会を通じて新たな知見を発信し共有してまいりました。

今後も小阪先生の遺志を受け継ぎ、レビー小体型認知症研究会が前進し続けられるよう、会員の皆様と共に努力を重ねてまいりたいと考えています。



代表世話人 池田 学


11:00-11:45 45分 レビー小体型認知症研究会世話人会

12:00-12:15 15分 レビー小体型認知症研究会総会（開場 11:30）

12:15-12:30 休憩（15分）

**ランチョンセミナー** 共催：エーザイ株式会社  
 レビー小体型認知症の診断と治療  
 ～小阪憲司先生が残してくれたもの～  
 座長 ▶ 池田 学 大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 教授  
 演者 ▶ 内門大丈 メモリーケアクリニック湘南 院長  
 \*本セミナーに限り、医療関係者の方のみのご視聴となります。

13:30-13:40 休憩（10分）

**シンポジウム** 小阪憲司先生 追悼記念学術講演  
 ～DLBの発見、現在、過去、未来～ 

13:40-13:45 5分 開会のあいさつ 池田 学 大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 教授

**シンポジウム 1** DLBの発見～日本が誇る小阪憲司先生の偉業  
 座長 ▶ 山田正仁 国家公務員共済組合連合会 九段坂病院 院長、  
 東京医科歯科大学 特命教授、金沢大学 名誉教授

13:45-14:10 25分 **講演 1** 小阪憲司先生との思い出  
 ～これからのDLB研究会  
 演者 ▶ 池田 学 大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 教授

14:10-14:35 25分 **講演 2** 小阪憲司先生との思い出  
 ～ $\alpha$ シヌクレインをめぐる話  
 演者 ▶ 岩坪 威 東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野 教授、  
 国立精神・神経医療研究センター神経研究所 所長

14:35-15:00 25分 **講演 3** 小阪憲司先生との思い出  
 ～臨床と研究  
 演者 ▶ 織茂智之 上用賀世田谷通りクリニック 院長

15:00-15:30 休憩（30分）

**シンポジウム 2** DLBを診る～小阪先生から教わったこと  
 座長 ▶ 小田原俊成 横浜市立大学保健管理センター センター長・教授

15:30-15:55 25分 **講演 4** 横浜市立大学で始まったDLBの  
 臨床と研究  
 演者 ▶ 井関栄三 シニアメンタルクリニック日本橋人形町 院長

15:55-16:20 25分 **講演 5** 疾患と類型のはざま  
 ～DLB概念誕生の意義について～  
 演者 ▶ 笠貫浩史 聖マリアンナ医科大学 認知症（老年精神疾患）  
 治療研究センター センター長・教授

16:20-16:45 25分 **講演 6** DLBを診る  
 演者 ▶ 藤城弘樹 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学 特任准教授

16:45-16:50 5分 閉会のあいさつ 岩坪 威 東京大学大学院医学系研究科神経  
 病理学分野 教授、国立精神・神経  
 医療研究センター神経研究所 所長

# LUNCHEON SEMINAR

12:30-13:30  
60min

## ランチオンセミナー

レビー小体型認知症の診断と治療  
～小阪憲司先生が残してくれたもの～



座長 ▶ 池田 学

大阪大学大学院医学系研究科  
精神医学教室 教授

共催：エーザイ株式会社

## レビー小体型認知症の診断と治療 ～小阪憲司先生が残してくれたもの～



演者 ▶ 内門大丈

メモリーケアクリニック湘南 院長

1976年、小阪憲司先生はDLB (Dementia with Lewy Bodies) の研究において画期的な剖検報告を行い、その後国際的なDLBの研究を牽引しました。1995年には、英国で開催された第1回DLB国際ワークショップに参加し、1996年のDLBの診断基準の確立にも重要な役割を果たしました。2006年には、小阪先生を中心とする第4回DLB/PDD国際ワークショップが横浜で開催され、これを契機に日本がDLBの研究における一大拠点として世界的に認められました。その後、国内における臨床的・基礎的研究の気運が高まりました。また、2014年にドネペジルが、DLBの認知症症状の進行抑制に関して保険適用を取得し、2017年に診断基準が改定されてからは、臨床医にとってDLBの診断と治療が身近なものとなりました。小阪先生の研究から臨床までの幅広い活躍は誰もが認めるものとなりました。

2007年11月、小阪先生はDLB研究会を設立し、2008年にはレビー小体型認知症家族を支える会を創設し、DLB研究会と同時に開催するようになりました。2015年からはレビー小体型認知症サポートネットワーク(DLBSN)と名称を変更し、全国の各支部の自主的な運営を尊重する形で今日まで継続しています。現在、DLBSNは、2022年3月時点で全国20か所のエリアが独立して地域に根差した活動を展開する非営利組織として存在しています。

本発表では、小阪先生のDLB研究における業績を紹介しつつ、現在、臨床の現場で行われているDLBの診断と治療に関して紹介いたします。また、小阪先生が横浜市立大学医学部精神医学教室を退官後に行った啓発活動についてもご紹介いたします。

# SYMPOSIUM

## シンポジウム

小阪憲司先生  
追悼記念学術講演

～DLBの発見、  
現在、過去、未来～



開会のあいさつ

# OPENING SPEECH

池田学

大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室 教授

# SYMPOSIUM 1

## シンポジウム 1

### DLBの発見 ～日本が誇る小阪憲司先生の偉業



座長 ▶ 山田正仁

国家公務員共済組合連合会  
九段坂病院 院長、  
東京医科歯科大学 特命教授、  
金沢大学 名誉教授

## 講演 1

### 小阪憲司先生との思い出～これからのDLB研究会

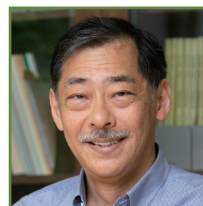


演者 ▶ 池田 学

大阪大学大学院医学系研究科  
精神医学教室 教授

今年6月には「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が成立し、大きな変革期が認知症診療に訪れようとしているが、小阪先生はご自身の研究、診療、社会活動を通して、一貫してDLBの当事者と家族のために、共生社会の実現を目指してこられたように思います。疾患の発見者が、治療にあたる専門医を育て、治療法を開発し、社会を啓発し、当事者と家族を支える組織を構築するという、大勢で立ち向かって来ても気の遠くなるような仕事を、時には唯一人で、時には強力なリーダーシップをもって、本当に長い時間をかけて一つ一つ実現してこられました。DLB研究会は、小阪先生のこのような壮大なプロジェクトを実践するための貴重な場であり続けたように思います。当日は小阪先生との思い出を振り返りながら、皆様とこれからのDLB研究会について考えてみたいと思います。

## 講演 2

小阪憲司先生との思い出～ $\alpha$ シヌクレインをめぐる話

演者 ▶ 岩坪 威

東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野 教授、国立精神・神経医療研究センター神経研究所 所長

私たちのレビー小体・ $\alpha$ シヌクレイン研究を終始励ましてくださった小阪先生への感謝の気持ちとともに、研究の進展を振り返ってみたいと思います。

私自身がレビー小体に興味を持ち始めたのは、1990年代の初めのことでした。アルツハイマー病脳から神経原線維変化の単離と特異抗体の樹立からタウタンパク質が見出されたのに触発され、まだ成分が不明であったレビー小体を凍結剖検脳から単離することを考え、井原康夫先生に相談したところ「自分たちが研究してきた脳のなかで、神経原線維変化が少ない例をユビキチンで免疫染色すると、皮質型レビー小体が見つかるものがある。これは小阪先生が記載されているびまん性レビー小体病に相当するものだろう。これらの脳を対象としてはどうか」と助言を頂き、皮質型レビー小体を大脳皮質のホモジェネートから密度の高い大きな粒子として分離すべく、ショ糖密度勾配遠心を繰り返しましたが、神経原線維変化やアミロイドに比べると量が少ないこともあり、当初は失敗が続き、ユビキチンに対する抗体でレビー小体を蛍光染色し、セルソーターで分離することが何とか軌道に乗ってきたのが1993年ごろのこと、この頃神経病理学会でお会いした小阪先生に、凍結脳からレビー小体を取り出せることを報告し、ぜひ頑張るようにと励ましを頂くことができました。

1997年の初夏、サイエンス誌に「家族性パーキンソン病で $\alpha$ シヌクレイン遺伝子の変異が同定された」との論文が発表されました。当初、我々はその意義をにわかに理解できませんでした。というのも、 $\alpha$ シヌクレインは「アルツハイマー病脳の老人斑アミロイドに抗原性が見出される、非アミロイド $\beta$ 成分 (Non-Amyloid  $\beta$  Component) の前駆体である」と報告されており、むしろアルツハイマー病の関連分子ではないかと思われていたからです。ただ、家族性の神経変性疾患で、病因遺伝子の産物が特徴的な蓄積物に関係する、という例は、アルツハイマー病におけるアミロイド前駆体遺伝子変異などから知られ始めていました。 $\alpha$ シヌクレイン抗体でレビー小体が染色されるかどうかは確かめてみたいと考え、当時昭和大学薬学部におられた中条茂男先生から分けていただいた抗体で、レビー小体が黒々と強く染まることを確認したのは、その年の7月上旬のことでした。しかしほぼ同時期に、英国 MRC の Goedert, Spillantini からもレビー小体が $\alpha$ シヌクレインの抗体で染まることを確認した、との情報が入り、熱い夏が始まりました。当時、我々はペンシルベニア大学病理学の Lee, Trojanowski 教授らと、単離したレビー小体を抗原として特異抗体を作り、真の成分を同定しようとする共同研究を並行して進めていました。このプロジェクトを進めていた馬場美南さん（当時東大薬学系大学院生）が Lee 研究室に渡航し、レビー小体を抗原として作った数百のモノクローナル抗体のうちにレビー小体を染める1つのクローンLB509を見つけ、それが精製 $\alpha$ シヌクレインと特異的に反応することを証明したのは8月のことでした。しかし同じ頃、Goedert, Spillantini らの抗体染色の論文は Nature 誌に発表され、我々の論文を American Journal of Pathology 誌に発表できたのは翌年2月になりました。

この間、1997年秋に横浜で小阪先生を大会長として開かれた日本認知症学会（当時まだ痴呆学会）学術集会は、認知症の主要な基礎研究者、臨床研究者を糾合する初めての大きな集まりとなり、私たちも $\alpha$ シヌクレインの同定を報告することができました。その後もことあるごとに小阪先生には温かい励ましを頂きつつ、研究を継続することができたのは、このうえなく幸せなことでした。

レビー小体研究で一緒にしてきた John Trojanowski 教授は2022年2月、小阪先生は2023年3月に、また井原康夫先生も2023年6月に、いずれの方もあまりに早くこの世を去られてしまいました。しかし小阪先生をはじめとする先生方の先鞭が、今日の本邦のレビー小体病研究に脈々と息づいていることに改めて思いを致しています。

## 講演 3

## 小阪憲司先生との思い出～臨床と研究



演者 ▶ 織茂智之

上用賀世田谷通りクリニック 院長

小阪先生は、詳細な臨床的な観察と鋭い洞察力によりレビー小体型認知症 (DLB) という新しい疾患を発見し、一連の精力的な病理学的研究によりパーキンソン病との関連を明らかにし、そしてレビー小体病という概念を確立された。その後 DLB の診断基準の作成には中心的な役割を果たし、治療においてはアリセプト®の臨床治験を主導され、2014年には世界で初めて DLB の治療薬として保険収載されるに至った。また2007年には DLB 研究会を立ち上げられ、医師のみならず、患者やその家族そして社会全体に対する啓蒙活動を行い、DLB は一般の人々にも広く知られる疾患になった。まさに臨床から基礎研究、そして臨床に戻すことを DLB で実現された先生である。

私はこのような小阪先生を尊敬し、また憧れていたが、そんな小阪先生から初めて声をかけていただいたのは 2003-2004 年頃である。MIBG 心筋シンチグラフィがレビー小体病の診断に有用であること、その病理形態学的根拠を学会や論文などで発表していた頃である。2006年小阪先生主催の横浜で開催された第4回 International Workshop on DLB and PD では、“Decreased cardiac uptake of MIBG as a disease marker for PD/DLB”と題して発表した。2009年 Brit Mollenhauer 主催のドイツの Kassel で開催された Clinicopathological Conference on DLB and PDD では小阪先生と私が招待され、“Cerebral nuclear imaging including MIBG”と題して発表した。この時 McKeith には我々の仕事に非常に興味を持っていただき、発表後握手を求められた。Kassel では小阪先生、奥様と3人でとても楽しい時間を過ごすことができた。小阪先生からは地道に根気よく研究を続けることの重要性を教えていただいた。2011年小阪先生はシカゴで開催された Movement Disorders Society (MDS) 国際会議に招待されたが、MDS の参加は初めてだったこともあり、私が小阪先生ご夫妻を案内させていただいた。2015年米国 Fort Lauderdale で開催された International DLB Conference では小阪先生、私を含めて5人の日本の医師が招待され、DLB の診断基準改訂の会議が行われた。MIBG 心筋シンチグラフィの有用性について、臨床的には山田正仁先生が、基礎病理的には私が発表し、2017年 Neurology 誌に発表された DLB の新しい診断基準では、MIBG 心筋シンチグラフィは indicative biomarkers として診断に直接寄与することになった。アリセプト®の DLB 適応拡大の際には、エーザイ株式会社主催の発売記念イベントやその他の講演会に小阪先生の前座で何度か同席させていただいた。歩くのが速く、いつもエスカレーターではなく階段を使われていたのを覚えている。また小阪先生とは、4冊の共著出版、DLB 研究会では第3回から合計8回発表の機会を与えていただいた。さらに2011年には小阪先生のご推薦で、NHK フォーラム“認知症新時代”に小阪先生とご一緒に出演させていただいた。

このように小阪先生と接することにより、臨床そして研究、さらに啓蒙活動の重要性を肌で感じるすることができた。Bedside to bench to bedside である。私の臨床医としてのスタンスに、多大な影響を与えていただいた小阪先生には感謝の気持ちでいっぱいである。改めて御礼申し上げたい。

最後に、DLB を通じて全世界に多大な功績を遺された先生に哀悼の意を表す。

# SYMPOSIUM 2

## シンポジウム 2

### DLBを診る ～小阪先生から教わったこと



座長 ▶ 小田原俊成

横浜市立大学保健管理センター  
センター長・教授

## 講演 4

### 横浜市立大学で始まった DLB の臨床と研究



演者 ▶ 井関栄三

シニアメンタルクリニック  
日本橋人形町 院長

小阪憲司先生は、東京都精神医学総合研究所神経病理研究室におられた1976年に、まだ知られていなかった皮質型レビー小体を見出し、現在の DLB の剖検例を初めて報告して以来、多数の剖検例の報告を行い、臨床所見とレビー小体の病変分布から、DLB とパーキンソン病 (PD) を含むレビー小体病 (LBD) の臨床病理学的疾患概念を確立しました。病理学的には、レビー小体の分布から、脳幹型、移行型、びまん型に、合併するアルツハイマー病 (AD) 病理の有無により、純粋型と通常型に分類しました。当時は、LBD の疾患概念は世界に共通のものとはなっておらず、レビー小体をもつ剖検例が異なる名称で報告されておりました。私は、横浜市立大学精神医学教室に在籍中に東京都精神医学総合研究所に伺い、先生からご自分の提唱されたびまん性レビー小体病 (DLBD) のお話を伺いました。

1991 年に先生が横浜市立大学精神医学教室の教授になられ、2003 年に退職されるまでの 12 年間、臨床、研究とともにご一緒に仕事をさせて頂きました。毎週行う臨床病理カンファレンスでは、新たな DLB 剖検例の詳細な観察を行い、臨床病理学的研究を継続してまいりました。この中で、脳幹型、移行型、脳幹型に大脳型を加え、純粋型と通常型に AD 型を加えて、各亜型の組み合わせにより、各々異なる臨床像を示すことを見出しました。DLB 症例の臨床的な観察からは、幻視、錯視、変形視、実体的意識性、誤認などの症状が DLB に特徴的であり、これらは DLB の視覚認知障害に基づくことを示しました。

また、DLB の免疫組織化学、免疫電顕を用いた研究を開始し、当初はユビキチンを用いてレビー小体を同定し、皮質型レビー小体が最も初期に出現する扁桃核での詳細な分布や、レビー小体が脳内でのような順序で進展するかを明らかにしました。その後、1997 年に、レビー小体の構成蛋白として  $\alpha$  シヌクレインが同定され、 $\alpha$  シヌクレインを用いた免疫組織化学、免疫電顕を用いて、DLB の病態機序の解明を目指した研究を精力的に行いました。皮質型レビー小体が一定の過程を経て形成され、最終的に神経細胞死を生ずること、DLB の特徴的病理所見である海馬のレビー神経突起の形成機序、経嗅内野皮質の海綿状変化の形成機序、扁桃核や辺縁系皮質でレビー小体と神経原線維変化が同一神経細胞内に高頻度に共存することなど、多くの新しい知見を報告しました。

1995 年、DLB の第一回国際ワークショップが開催され、DLB の概念が国際的に共通のものとなり、現在につながる DLB の臨床病理診断基準が作成されました。この中で、先生はその中心的役割を果たし、教室でも臨床診断基準にある各症状の評価と診断基準の感度や特異度を検証しました。また、病理診断基準にあるレビー病理や関連病理の研究も継続して行い、その後のワークショップでも常に新しい研究成果を報告しました。

このような臨床、病理研究に基づく DLB の疾患概念の検証と発展により、国内で頻度が過少に評価されてきた DLB が、実は AD に次ぐ第二の認知症疾患であることを明らかにしました。



## 講演 5

## 疾患と類型のはざまーDLB 概念誕生の意義についてー



## 演者 ▶ 笠貫浩史

聖マリアンナ医科大学 認知症  
(老年精神疾患) 治療研究センター  
センター長・教授

小阪憲司先生が1976年に報告したびまん性レビー小体病の症例は初老期発症の女性例である。認知機能低下とともに、早期からパーキンソニズムを生じた点が定型的アルツハイマー病の臨床経過と異なっていた。この臨床的特徴について「おや、どうしたことだろう」と臨床的違和感を抱いた先生は、神経病理学的な具体的所見ー皮質型レビー小体ーを見出した。後年先生は「セレンディピティ」と振り返っておられるが、一例報告に留まることなく、その後一連の剖検例の仔細な検討、情報蓄積を経て、「レビー小体型認知症」(dementia with Lewy bodies : DLB)という新たな臨床病理学的疾患単位概念を世界に先駆けて提唱していくこととなられた。これは複雑な臨床現場に新たな光を呼び込む、「絶妙な補助線」を引く行為だったといえることができるだろう。日本の医学史的な観点からみてもその発見・発信の過程は輝かしい業績であり、この先駆的な功績を継承し、更に発展させてきた多くの国内外の医師・研究者たちの日々の努力の結晶が、DLB 臨床・DLB 研究の現在地点を作り上げている。

アルツハイマー病と比較してDLBはその病初期から神経精神症状が高い頻度で生じることが知られている。この点についても小阪先生は既に1990年の時点でDLB剖検確定例の生前臨床情報の特徴のひとつとして報告している。この論文の対象例のうち、DLB common form 群において、サイコーススを初発症状とする例は18%を占めていた。記憶障害が初発となる例が57%であることと比較して決して少なくない頻度であることが分かる。米国のDLB臨床研究専門家のひとりであるGalvin 医師は、DLB がしばしば「誤診 (misdiagnosis)」されることに注意を促しているが、演者はこの表現は若干強すぎるかしらと思う。病初期の優勢な症状・その時点までの経過を検討した際に、その段階では(例えば)「サイコースス」や「うつ病」といった精神疾患名を臨床診断に据えざるを得ない事例は実臨床上、少なくない。この事情は臨床精神医学が長きにわたり用いている二本立ての診断体系ー疾患単位か類型かーが孕む根本的な困難さがもたらしている。McKeith を筆頭とする国際ワーキンググループが示したprodromal DLBサブタイプの一型・精神症状発症型 (psychiatric onset DLB : DLB-psych) は、レビー小体病性の各種老年期精神障害(典型的には老年期発症のサイコーススやうつ病)を示すが、「疾患の疾患たる所以」をバイオマーカーの精緻化で担保したとしても、近現代の老年精神医学が抽出してきた「老年期精神障害」の各類型が理念型であることを踏まえると、診断学的には真の意味での継往開来が達成できないというジレンマが生じる。現状を俯瞰して小阪先生はどうか見解を示されるだろうか。

## 講演 6

## DLBを診る



## 演者 ▶ 藤城弘樹

名古屋大学大学院医学系研究科  
精神医学 特任准教授

小阪先生に初めてお会いしたのは、愛知県豊橋市の福祉村病院で開催された臨床病理検討会でした。豊川市民病院(豊橋市の隣)の研修医だった私は、精神科の研修中で「ピンク色の服を着たヒトがみえる」と話される高齢女性を担当し、検索した文献のほとんどが先生の記述だったため、その名前を知ったのでした。臨床経過の呈示後「それでは、病理を小阪先生お願いします」と紹介され、登場したときの驚きは、「なぜ横浜市大の教授が豊橋にいるのか」と鮮明に記憶しています。私が先生から教えていただく機会を得る幸運の始まりでした。名古屋大学の大学院に進み、外勤先が福祉村病院となり、小阪先生が6月から院長として赴任され、再び驚愕したのでした。毎週ランチを摂りながら、物忘れ外来の新患の助言を受け、病棟も一緒に担当させて頂きました。また、横浜市大から同伴した大学院生と毎週1症例ずつ検鏡する機会を得ました。初回は、びまん性レビー小体病(Pure form)の40代女性でした。大切片の標本を限なく、皮質型レビー小体を100分間検鏡し「これが基本だから、よく見ておいて」と話されました。延々と続く皮質型レビー小体の検鏡だったため、観察時間を確認してしまいました。その後、所見をありのままに記録することが、緻密で丁寧な観察の上に成り立っていることを繰り返し痛感するのです。病棟では、一つ一つの症候や画像所見などに高い興味を持って、ときに感心しながら、臨床病理学的に解説して下さり、診察感覚をありのままに大事にされているのが印象的でした。「病理を知っていると、臨床の診かたが変わるんだ」と神経病理の勉強を勧められ、日頃の姿から説得力が圧倒的で、大学院修了直後に留学することになったのです。

DLBでは、臨床的特徴のみならず、病理学的背景を明記した臨床病理学的基準が示され、アルツハイマー病やパーキンソン病とは異なります。病理のみならず、診療に尽力されていたからこそ、診断基準の作成に加え、非薬物療法・ケアの重要性を強調され、家族支援に力を注がれたのだと思います。常に自然体で、ありのままの事象を理解する姿が一番の教訓だと感じております。小阪先生がDLBの剖検例を主治医として担当したことに端を発し、世界のDLB研究を牽引され、半世紀が経過しました。2022年に公表されたICD-11では、レビー小体病による認知症が明記されましたが、レビー小体病と捉えることの重要性を一貫して指摘されていました。臨床医学の発展に伴い、小阪先生の考えに、ようやく追いつく機会を得たのかもしれませんが。疾患修飾薬の登場によって、レビー小体病の臨床病理学的理解は、ますます重要となっており、記憶に残る小阪先生の言葉を紐解きながら、先生の論文を再度熟読する日々です。言葉では言い表せない多くのことを教えて頂き、心より感謝しております。安らかなお眠りをお祈り申し上げます。

閉会のあいさつ

# CLOSING SPEECH

岩坪 威

東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野 教授、  
国立精神・神経医療研究センター神経研究所 所長

## 賛助 会員

エーザイ株式会社 インテグレイティッドディメンシアストラテジー部

エーザイ株式会社 ADBH クリニカル 日本・アジア臨床開発部

エーザイ株式会社 メディカル本部 クリニカル企画推進部

株式会社上山製作所

クラシエ薬品株式会社

住友ファーマ株式会社

一般社団法人総合ケア推進協議会

大同工業株式会社

日本ケミファ株式会社

一般社団法人日本セルフケア研究会

日本メジフィジックス株式会社

大和プレス株式会社

PDRファーマ株式会社

(全て五十音順)